高尾新字文

四

へ13
1246
4

1246
4

高尾船字文第四輯

○ 頼兼怒て高尾を殺す

附り 夫れ山東宋公明 是れ関東官領職 其園中に密書禍

○ 龍勢庫の尾花火を戦わす

夫れ須門が逆旋 其水練の忠義源

是れ宗重が白浪裡

千田賢鏡千
四涙
一度徒楠一
度愁

足利頼兼

娼妓高尾

化粧やうの乳九鬼乃魂を
かくしてくれる百合の花

高尾船宇文第四輯　　由亭馬琴著

頼兼怨うらくる尾を教さて
かくて牧ひ云ハく門の汐より紙を取りし涙の江が方へ仮
頼のうりとくの毒しのふ。あの花の名義の侍るまべ仮平牧とうらぶ。
牧ひを逆さまにとれば、寝書とかくてぷんとあくさまりる。扨も浦の
る尾ぷ牧ひにうけ出され漁人の解事のあてといへども。人面十とうを
ちうひ。牧ひを嗤ひまうどの情を泳うしらべうらひ。ぷも。後
夫こる尾がそぶりと精しのあひ。ハわどハ下月おまうもあ人魚
ぷこる尾が思へのうとぢ嘆と深みとまりし深共ようて。元い麗こ乃

あぐれるをハ切ゑ[illegible]て[illegible]ひをそ[illegible]ぬ[illegible]さんと
ゑひ[illegible]く[illegible]尾をまくめ[illegible]ひをむ[illegible]ぐさめり。ハハ[illegible]
[illegible]通ゑ[illegible]の沖よ。ゑとり[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]
しが。忍ち[illegible]一波こぎ[illegible]
[illegible]切[illegible]ゑ[illegible]
[illegible]の[illegible]産[illegible]
かゝ[illegible]ハ[illegible]
いゝ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]

すゝ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

沖ふかきかたちにてなくさぜひにへとすあやせば冷霞もけぶるよりぬ
やれひれ山にて病乳も出やせんとぬくとるとめて樹学の書ばかりみる乳
ちとしをさせやさんとこひ言尾の母くまでやとよる事なきまば
格別の山にあぐさこいなくとこと。今青八海ゑへ山通ひあまうと
中ふぞ人の乳にさるこひの八幡貫仁の大羽。千吉大くらこ湖をけくす
うへくにいすはひとこたでーが内ありとも引尾ーとずぐたるふ松
石され鎖門を作使まで海ゑ川へひのゑへ松すでに海ゑにこれぬの
宮尾丸ようーまーせ谷霞八次の石よへくく安すこりるのこち藻
工ゑとこるあ言尾いいづくるぞやそちが高人の来りのふにたあく

おひやせとぬりりう。山時こる尾八。毋に二階よりうつくと。
十こうげるとこひつぎくあるこうーが今毋の高人の来りのひしこ云
しこ夢ぞ十こうに来りしこやとおいあぞしこ二階をりぞ
こ乃中陰ようりまとえれべれひ公毋こるんぐ空ーのふ言尾是を
ゑんく。おゑ中ぞしこ又二階へもとより。夜ぞ川のぎつこより。梶ぞく
又ぬりりりるへぞちが高人の来りのふにたいくくたあ出遠やこあぞあ。
宮尾是毋夢く。二階のうへより。つぎ乃りふへんたいきれべ遠へこ沢。
その人宝こく宮の ゑべりれべ。二階へ上りのふ来のゑこぬるゑへあゑ
まーとここへりるぞ。れひひこ山云夢ぞんに無へるへこも。毋に

流れの男かゝる雑談云へつゝのまゝみゝんと咲くぬゝして地へ倒れ
ゝとゝぶらくかゝくとおろひ娘さる尾は却ど厩の五通ひゝゐたと恨ミ
かゝる河事あゝんまゝ二階へ上り抱ぶせと彩うとのゝりゝをうゝ
二階へうゝゐひまゝ彩うゝへんゝを固ぬ五新ゝく床ちらにゝ
そひ沖の方を泳めゝへゝさる尾へ彩ゝをうゝ泳うて救ゝ尾りゝ
立ゝめいきをはくゝゐゝゝ尾ゝとゝぶらくゝ侍とうんくゝ酒ゝくてゝ情
を引くゝゐゝ清ゝと。題ゝく用意の酒さるゝを持ゝ出ゝ重とゝゝくゝゐ
題にゝゝゐゝ彩ゝゝひゝれ冥界の直厩向ゝぶゝゝの上ゝ物なれゝゝゝ
屋ゝを辞退ゝゝのゝ事ゝゐゝく。ゝをゝゝ引ゝくゝゝゝのゝ清ゝ尾ゝ

すゝゐゝゝ。ゝる尾んゝゝゝひゝゝゝゝゝ我行ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

根こまうどや。けわどこ殿乃ひ通ひ通ひ通ひどこらうこられた。
とたゝれへおるうへぐさごんを来しまし。殿の下分ともおぐさあや
せて。根ゝ乃ゝ乃ゝ乃

よりくに酒盃のうへ。ちどりくに時雨を待のくと書てうりる。そこ尾
そのうまをかくしてくちくに移たゝ十三くとそこぶさてはがるまたるくんと。
見こと丸くに懐中。のくにくに仲しかりるそやセりの様も雪へ。
ゆくひ毎うくに酒の酔さめくに。郭こりのひ。姫こと物をさびの衣。
かりの密書の。ゆくひ毎くちよおいてあひ。ひのくりを待の先ひ。これくへ
びゝぜひのくに尾をゆく世こしてのるひりるびいりふこる尾。その方りゞが
懐中にのくしに流に老ぢりくやと問のくに。こる尾いちゞめて問り
笑さる仲にとて取。ゆくに云りりいりの世いりの時ふ。あらあ
義りのひゝぜさ毎りにゆくくしに人をりぶりられた。世の中に信を

ちゝぬ勇ゆ多きことのことくりる。ゆくよりに懐中に残く。
との方にちりくしまりさりりに。こる尾に夢ゆく勾ちゆのごとき新
くに恋の後りゞに肩をに。花のごとき唇をこりるりくに。声をこるめ
云りるくりる。ゆくに中に流の男にのられた。人代りの家に来い
のれにのこのくに人にこの酒ひりるそや。新ひゝゝやこる尾り家を
りくにゆりるゆくに後りひ。人間りにいりるのくに先ゝゝをゆりりまゆ。
我りりまりゝく。その方に海人ゝゝ。今ちりに後悔ゝ。家
いりゝ毎りに。のくりにゝもりりりりさんゝその出我に我にりくにせよ。
こる尾に新ゝのちりに。こりに紙とのりあるくにとこゝ。ゝ紙ゝ

大切のものとおもへさう。この紙とものとうりかとんでいろこびをる
わたしは紙のはこの月のはこを洗ふ。おられた一つの孫ひとりけば
ゆくへしらずする事あるまで。おくのひかの梅一ハ梅雨のあれ孫うひ
なりはけいつかはさんで。あく紙をうせ。尾星をやくみ。
ゆびをおくりたりし。時西田十三郎といふ人ふうくいらせしが。今
ようの後。ようをナ。紙をそのうへつりを。十三さんの長食
ほうそもものをきるあうに枝ばし。あつぱ。紙を五十さん
おくりのをひりるこれいつとくをとき移ひくその方を今日より
西ゆをうぶ。長とあり。生涯ほうせに枝ばをつくらんとしまつるふく

その紙をうくせうる尾ばをこらひく我をぞあやしてゆ紙を五
んとしのへたこのをあのをあのをあるまとくさあるれ物へつひのを
なるほのに涙をとあるをやナ三さんを来ぬるを紙を
五十さん。おのひのひとりの我とこれ奥州の大守。第八別の友
紙をあるの物をいふ物ばあるびをは紙をうくしたをよ。
をる尾星をあるくをいのをあるとをと。十三さんをとあるうちへ。
ひとり紙をとるをとるをけををびをと。紙をををとをはくあるれば。
おくりの寒をとをとんとをる尾ば懐中へをを入をへをる尾ば寒をを
涙をびをとをびをひに押つおを合ををををびをこ五刀をまを倒ををくおくりの

ばたちうせ離れ、しかとくたちすぬきあてうつる尾は見さうんて
ろうと叫び人教へしかりけり。教へる人今こそ尾が人こそ
叫ふ声あるのくぬぢちうる尾を教へさんとろ二巻巻り。絵ふたの
ばたうる尾がもきこどりれて三巻を右のもとの力
と振りち。蛇の新人血をとをとぎ。ちのまに傷き傷め。恐れれば
ことを教へも。胃ようれ西国雑云ぬふりしそゆうせどや。
さわどぬ面に添ふうはせうを出されくきぬてうぬ。ちれ蛇
出ぬ蛇ひ。おくとこ我よつうしろ離ひのうどをちひきうせんと。
水のどれ丸振りち。ぬのゆうるうこる尾が服え。ふひの横まうど

抑ひとり様子に抑。あて。兵二刀に切のべ。むひ人上教へうれ
ばたのうち。傷ふちれのこ刀とうり流れるぬうく流の蛇むえ
ふりるぬ沢来こ教言て打抑ぬうき。絵門谷義。とこちだ。二落
の上二うを上れ。ぬ教ひ人血てそこ。ばたうせをとれ抜のひ谷義ふ
抑我ひせ抑をてのうまひりるへ千方が娘言尾我よ弟して
ぬれせ一ぬ。ら対ふ正れひ。ぬ。ぬ。ぬ

扨これ程迄もきつぬ老の母のさつきたのとふさえと処願のおそさ
せきまへに教ゆもふ侍のことおもしめしそちが身の上乳をひとる
我母ことゝ思ひるべそのうへ持参をつゝし進ずくさせん。
まつる尾ゞ帯ひ料理門よりたゞちとゆるしてとゝ出
へ扨入るべこに教ゆの性を扨ぐむ西の空ゆれそくもはとゝ
ばるべいつゝくもえいそおまこ孫門おうへりとえのゆゆいて
ゆひ出まり門へ帰りのひ入る。

我物語帯の尾誘史をとゝうえん

扨もとゝ侍対うえへのびくゆまくとゝる尾ゞ初七月に初

扨寺門の門松入まり扨も姫ゝ尾あへゆくゆゆ行多く今月初七
月にあうゝひ扨それ尾ゞとゝゆゆゞうゞかりそあゞうゞ尾蓮花ゆ
伺り蓮のもはもうもゆゆゝ尾るれゞおゞ金今月ゆゆあひめされ。
薄ゝ門のゆゝうゞゞ尾の伺ゆゆふまゝうゞ夜尾の伺るゆゆゝ
蓮もまうアひゆゞ母きゆめく志をとゝゆゆゞ門ゆゆ伺
うゝしあうゝと河まゝとゝゆれゞ教ゆもかく娘を教され
てゆゝうゝ娘むをゝさうゞき部ゞ弟んをかゝゞゆゆひかゆゆゆて
やされ門門を伺ゆゝて薄ゝのうゞ尾ゞゆへゆゞゆゝとゝゆゆ母の河者
いうくゆゝ迄ゆゆゞうゞ薄ゝ尾を言てゆうゞゆ娘ゝ言尾ゞゝ迄ゆ

そばのかたきに、自業自得天魔の障化とやらんで、ぞのぐ
る尾世の名をうりて、その口惜おもかつ、たいなる船の舳ひくと。
多くの人かしづき、百年の後進ぜんしようの仕合、もんぐるの涌
障の真を乗せてきたる尾おくるのき命を拾ふ。其船軍
所詮、屋島をめざす世のあるひ、ひけ船乃ゝ言尾丸も。島のこふ
ぶ、ぶ、ぶ、

清門のとの方へ向へ谷義すっさびとびろりく。板屋あげ高り首
つきぬ川ぶんぶと投のあいわれもとすの板屋。そばの岸ー小舟ろ
ゆ。まつ。さっさあにあげのこと怪我のそるあい見参と船を扱
立く通てりく。ぶまに通ようる高くみの舟。能員ろ行清よせる。
ぶまに見参清門よ扱とれ。ー小舟。只まあ舟ど射ろりる。
敷ひとへあっまとかろる夫。力をぬひてとろひのまく。こく波
せんどく通せどうる。谷義九よ扱みの懸と扱。石のよに掉を
さ。九紅を扱りれども。弱ふ扱ふる尾の大紅ろれば遠遠
自ぬ。ぶりて。公をあせろ。汀乃方。扱する波の小紅を。

谷義ろのろびと。者ふ扱ーて扱ろりりりりりそのふろよ
ぶ。紅せん。てろろのれば。ゆうすと扱ろよりるあー。事清ろろ
ろびる。義人のどとに。ゆうせん。と声とろろに。ゆいまども。扱人
向もせび。扱小脇ものろりり。谷義大ふとろを立見ろぶ高
紅のまに唖ら。鼻ろ。しく。ぶろ人に住ゆろ向ろと。矢をろ射きて
紅を押。ろの扱ふに近ろる東。ぶろ。ろりぶろ七八ろるよりり時。
谷義武義のり藤を出。見と一そくれ。縫めろを抜ぶろ。せ。
ろろ。扱ぶ。ぶ。ぶ。

谷義とのともいはで。それ海人よむんどと組む輩もちまものの
しるべ〜。別まてに組。てんぐに別まで後ろに互に組合ぐられ中〜
ざんぶと落れば中〜そいぐこと合ぶ谷義ろ。そのうちこまうもふく。
なの海人。その之母ようも母。女人の男子あれにまそうこ子。
海上の渡嶋人。鳴物持とろうんこすうて。とうぐに武いかこれ。武
わくいまこ彼ろ年のちろうして押せばこれ彫屋のみうを後ろ勢ひあう。
いづまもおろうあ。男子〜男子。修験もたてぐにうんくよりろ。ろ行映
する歌の松風。ろうろうろ。沈あり。やうく谷義とやするる。
今水中に戦よるのい男ろあ〜ろあ。ぐろやと。声ろもあるう海〜海〜。

谷義とよろうこ子。ぐ。松の風ろうして激付。ろうきげくやりろ海〜ぐ。
たくろ海〜よろうく。鬼母に仕の運に君を付まうんろのそうぐ。
男子ぐ。ぐろうく。来彼ホ先〜海〜海ろ海人ろ海ろ。子様ろを何ろ和
海ろ。ろ海ろ和義の谷義ろ子。いまぐ子。面をなぐぐ。敵ろ味方ろ。紅底ろろ
ぐろく。ぐ海門士対ろ〜。東ろのの。まろのぐ〜。子ろ谷義も
海分。来眼ろろう〜。芸術ぐろのく。豪傑をなぐぐ。呉今のろれ
ゆろ〜の子ろ。芸術ぐ子ろ子ろ。芸術海人ぐ。来ろ〜ぐろうかぐ海ぐ。ぐや氣を海
海ろ子〜。海の悪人のろ。ぐろ。来ろ〜ぐ。来ろ〜ぐ見を海ま。紅底ろ行を
海ろ。来ぐ海ぐ。来ぐ海ぐ。海ろ。芸海ろ海ろ海ろ

谷義は、はるかに、おもひ、こゝろの、せきあつ。金花山の、雪、ふかくこもれよ、かの、金花山、出羽、参、くるあを、ひとり、自由、なり。

されば、忠義の、主義を、まもり、折を、まつ、遠人、だくを、待、ろさんとぞ。

その、内、まを、待、は、ゆ、ゆ、内、ぶ、迫、まつ、歌の、ことは、荒師

よ、獄、のいろを、見、牧、の、大、波、を、かろく、とふ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、

蔵、こゝ、ろ、水、中、街、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、

生、ぶ、能、を、年、立、清、生、を、板、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、

遠、生、谷、義、は、年、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、

宮、尾、松、の、文、中、冨、年

石澤氏

千字文
千字文